



## 日本の経済成長－低迷の理由と対応

経済学研究科委員長 出島敬久



大学院経済学研究科委員長を拝命しております出島敬久と申します。平素より、経鷲会会員の皆様には、学部のみならず大学院にもご理解とご支援をいただき、厚く御礼を申し上げます。私の専門は労働経済学ですが、教員一同の研究・教育活動が経済学部・研究科の発展に揃って貢献できるよう努力してまいっている所存です。

さて、経済でも労働に関する話題で、近年関心をもたれているのが、1人当たりGDPや賃金が、日本は主要先進国の中で最も低迷している事実です。たとえば、COVID-19出現前、2019年の1人当たりGDPは、データの揃う1991年と比べて、アメリカで2.68倍、ドイツで2.69倍、フランスで2.70倍、日本は2.06倍です。2019年の1人当たり年間賃金は、1991年に対して、アメリカで1.40倍、ドイツで1.34倍、フランスで1.34倍、日本は1.03倍なのです(OECD.Stat)。

その原因として、よく指摘されるのは、教育訓練や企業組織の問題です。具体的には、学校教育が記憶と筆記試験の訓練に留まりがちであり、企業組織では新卒一括採用と終身雇用、年功序列の慣行が残る一方、若者の処遇が抑えられ、イ

ノベーションや起業、それらに寄与する転職を阻害しているという見解です。

しかし、これらの教育や雇用の慣行は、今に始まった話ではありません。こうした古典的な慣行は、1960年代の高度成長期には確立していて、むしろ現在まで、一貫して緩和される傾向にあります。

たとえば、学校では、対話型や協働型の演習が増加して、記憶よりも主体的な活動が評価される機会が増えました。成果の一つとして、学生の実践的な英語力など、グローバル化への対応能力は着実に改善しています。また、企業でも中途採用の拡大や成果主義の浸透とともに、賃金や昇進などの処遇でも、個人の能力と努力に応える部分が増えました。

ところが、簡単な指標の一つ、日経平均株価が最高値をつけたのは1989年12月で、38957円44銭。それが2022年8月上旬では28000円台。正確には、物価変動と採用銘柄の変遷を考える必要がありますが、30年以上前の方が株価指数が高いのは、主要先進国で日本だけです。1人当たり実質GDPの成長率は、80年代では年率平均3.2%、2010年代では1.2%、これが日本経済低迷の事実です。

古典的な教育や雇用慣行が日本経済低迷の主因なら、それが現在よりずっと強固だった1980年代の方が、株価も経済成長率も堅調だった理由が説明できません。むしろ、近年になるほど、とくに日本だけ悪化した指標を考えるのが、自然な犯人捜しです。それは何なのでしょう。

実は、この1人当たりGDPの分母には、働いていない高齢者もすべて含まれているのです。さらに、1人当たりの賃金でも、条件がなければ、分母には短時間労働者が多く含まれます。それらを統計的に分析すれば、日本の経済成長が近年になるほど低迷する主因は、少子高齢化による非就業者と短時間労働者の増加と判断されます。これら指標は、1980年代と比べて現在の方が悪化している、日本で数少ないものなのです。

結局、日本の経済成長にとって、最も危惧されるものは、人、そのものの持続可能性だったということです。現実には、少子化を緩和するような子育て支援策や税・社会保障制度の改革、そして少子高齢化を見越した公的年金、健康保険、介護保険制度の改革が、経済成長にとっても最優先課題だったのです。

少子高齢化によって、すでに産業の構成も変わりつつあります。たとえば、過去20年で、労働時間を調整した上で、最も雇用が増えた産業は医療・福祉、職業では専門的・技術的職業従事者のうち、医師・看護師など保健医療従事者です。ただし、この領域は、患者と医療者の比率が長らくほぼ一定であることから想像されるように、他産業に比べて、機械化やICTの活用による労働生産性の向上が困難です。日本の労働生産性や賃金が、以前ほど上がらなくなったのには、この経路でも少子高齢化が影響しています。

最後に、近い将来の構想に触れておきます。大学院経済学研究科では、理工学研究科と地球環境学研究科に連係して、応用データサイエンス学位プログラム(修士課程)の設置計画に協力しております。このプログラムは、社会人のリカレント教育も視野に入れ、データを基にした経営戦略や経済政策の意思決定を担う高度な専門職を養成するものです。それは、上の例で言えば、少子高齢化の影響を見落とさないような、真の因果関係を推論する技能を育てるものと考えております。新たな構想も合わせて、広く本学に対します皆様のご指導とご鞭撻を、今後ともお願い申し上げます。

## 宝台樹ヒュッテ

佐々木一夫 (1967年 経・経)



最近の筆者と妻  
(妻、淳子は1969年  
文学部教育学科卒業で  
ワングルの2年後輩)

我ら上智大学ワンダーフォーゲル(WV、渡鳥の意)部は1963年7月、11日間の夏山合宿を終えたその足で、山小屋建設のため9日間のワークキャンプに突入した。総勢70名で上州武尊山麓の宝台樹(標高800m)に、我が部の山小屋を建てたのだ。その時私は1年生部員であった。

主な作業は、山小屋の基盤となる石積みと、地元農家の前に運ばれた木材、セメント、砂利などを建設予定地まで運び上げることにあった。農家から予定地まで担ぎ上げると約1時間を要した。最も重い梁の運搬は4名で交代しながら運び、50キロのセメントは、途中で休憩すると一人で立てなくなるので、一気に運び上げた。

夜はテントの中で就寝するが、その前に草原に寝転び満天の星と無数の流れ星を楽しむ。天の川が美しく輝く。しかし単調な体力作業の連続で、私を含めて多くの部員は閉塞感、虚無感などに襲われた。発狂する寸前に辛くも予定の作業を仕上げた。帰りの上越線で、乗客たちは我らから離れた車両に移動する。何故かと思えば、夏山合宿とワークキャンプの計20日間、入浴などほとんどしておらず強烈な悪臭を放っていたからである。

同年11月に、山小屋完成式を現地で実施した。もちろん電気、ガスなどない。あるのは業者が施工した天然水の水道だけである。それでも我らは

感極まった。北に上州武尊山、南に谷川岳を仰ぎ、白樺林と草原の中に聳え立つ「宝台樹ヒュッテ」は荘厳としか言いようがない。

ヒュッテ建設には多額の費用を要する。大学から80万円借入れ、その返済に部員は種々のアルバイトを課せられた。最初の2年間で40万円返済できた。3年生になると私は副将及び山小屋係を担当した。4年間での返済は大学との契約事項である。急がねばならない。そうした状況下で幸運の女神が微笑んだ。

当時はフォークソングブームで黒澤明監督の長男久雄をリーダーとする「ブロードサイドフォー」が一世を風靡していた。すでにWV部を退部していた友人のKが久雄と従兄弟であることを聞き及んだ。彼にブロードサイドフォーのコンサート実現への協力を懇願したところ、無条件で承諾してくれた。「早速、久雄と交渉しよう」と言い、黒澤家を訪問した。

最初にお宅でお目にかかったのは黒澤明監督その人で、スコッチを飲みながらの食事中であった。「ゆっくりしていきなさい」との言葉に「有難うございます」と返事し、久雄に会った。彼とKはすでに話を詰めており、講演料、日時、場所などを確認するだけで契約は成立した。

コンサートは1965年6月、場所は虎ノ門ホール、公演は3時からだが、開門と同時に会場は満杯となった。控室に詰めていた私は、高校三年生の女子学生と話をした。彼女は無名時代の森山良子。久雄たちが「若者たち」などを演奏している合間に、2、3曲歌った。素晴らしく透き通った声に全員圧倒された。コンサートは大成功であった。収益は40万円をこえ、大学への債務は皆無となった。



1963年7~8月

砂利、セメント袋、重たい栗の床材、長大な梁材、合板。  
家1軒分の資材を青木沢の部落から部員達の背で運び上げた。



1963年7~9月

建設作業には飯場がなくてはならない。  
どこの飯場でも頼りになるのは女性達であり、食料の買い出し係。

上智大学体育会  
ワンダーフォー  
ゲル部機関紙記  
事より引用

山小屋建設のた  
めの資材運搬作  
業と炊き出しの  
様子

山小屋はWV部員に充実した時間を与えてくれた。薪ストーヴを囲んでの談笑は楽しい。思想家コリン・ウィルソンの著書「アウトサイダー」は当時のベストセラーで、そこに書かれたサルトル、カミュ、ニーチェなど、さまざまな思想家や小説家への論評にかかわる論争は私にとっては大きな糧となった。負けると悔しいので、さらに読書を重ね再挑戦に臨む。冬季には輪かんじきを登山靴につけラッセルの練習を兼ねて標高2158メートルの武尊山を何度も登頂した。

4年生になると友人と2人で8月中、山小屋で生活した。客人が訪れてくると、山小屋に備え付けの鐘を慣らし歓迎の意を呈する。客人は一様に「自然がいっぱいで素晴らしい」「水が冷たくて美味しい」「ランプ生活ってロマンがある」などと笑顔で語る。「そこの白樺の枝に座って。写真を撮りましょう」と私は応じる。彼らが里に下りる際には「またお会いしましょう」と感謝の念を込めて鐘を鳴らす。

上智大学の学長も山小屋を訪れ、ランプを多数掃除してくれた。学長はWV部が自力で山小屋を建設したことに感嘆し「渡鳥が自分達の巣を求める心情でしょう。しかも部員のための独占でなく、



旧宝台樹ヒュッテ（1963年（昭和38年）10月竣工）



1970年に二人で山小屋を訪れた時の筆者（左）と妻 淳子（右）

同じく自然を愛する人々に開放していることに一層嬉しく思う」との訓示を述べられたのが今でも心に残っている。

この山小屋は1979年10月の台風20号で損壊した。WV部員、OBは建て直す気力はもはや無くなっていった。大学側に整理を依頼したところ、快く受け入れてくれた。さらには大学管理の下、新たな「宝台樹ヒュッテ」が1982年に建設された。旧ヒュッテに使われた石積みは、現ヒュッテのケルンとして残されている。

（オリンパス株式会社OB）



#### 山小屋建設にあたって 学長 大泉 孝

「ワンダーフォーゲル部が、山小屋の建設計画を進めると聞いて大変嬉しい。渡り鳥が自分達の巣を求める心にも似た心情でしょう。しかも部員のための独占ではなく、同じく自然を愛する人々に開放するという一層嬉しく思います」 山小屋建設趣意書に寄せられた当時の上智大学学長 大泉 孝先生のお言葉。写真は竣工時、旧ヒュッテに泊まれたおりのもの。

上智大学体育会ワンダーフォーゲル部機関紙記事より引用  
大泉学長、山小屋にて

## 写真ギャラリーを通じたソフィアンとの出会い

桑原清幸（1995年 経・経）

皆様、こんにちは。公認会計士・税理士の桑原と申します。私は上智大学を卒業してから約30年間、会計監査や税務に関わる仕事をしてまいりました。現在は、本業の会計分野の仕事をしなが、東京・馬喰町にて写真のギャラリーを主催しています。僭越ながら貴重な誌面を拝借して、学生時代の思い出や卒業後のソフィアンとの関わりについてお話をさせていただきます。

### 1. 学生時代の思い出

私は経済学科でしたが、上智の授業ではほとんど会計の勉強はしていませんでした。1, 2年生の頃は、淡々と必須科目を受ける日々でしたが、岩田規久男先生のマクロ経済学や、鬼頭宏先生の人口学など、振り返ると贅沢な授業ばかりでした。3年生からは兼光秀郎先生のゼミに所属しました。兼光先生は残念ながら2015年に逝去されましたが、

卒業後も優しく接していただき、私のような不勉強な学生も温かく見守ってくださいました。当時、兼光ゼミは優秀なメンバーばかりで、同期に、上智の経済学部で教鞭を執っている近藤広紀さんや、学習院大学経済学部教授の鈴木亘さんも在籍していました。ゼミ発表のレベルが非常に高く、私には到底ついていけないと感じていましたが、同期の皆さんの活躍もあり、兼光ゼミに所属できたことをいまも誇らしく思っています。

とはいえ経済学部の授業は固い内容ばかりだったので、たまには息抜きをしようと、空いている時間があれば他学部の授業を聴講していました。当時は東京大学から教えに来ている先生が多く、村上陽一郎先生の西欧近代科学の授業にはとても感動したことを覚えていて、当時の参考書をいまも大切に持っています。また、国連難民高等弁務官だった緒方貞子さんの授業に聴講したり、寺田勇文先生のフィリピン語の授業も受けてみると、興味の赴くままに学内を彷徨っていましたが、振り返ると大学には本当にいいカリキュラムを提供してもらっていたと思います。

## 2. バブル崩壊と就職難

上智に入学したのは1990年でしたが、その後バブル崩壊を経験します。私が1年生の頃は、都市銀行が大量に採用している時期で、選ばなければどこにでも就職できるような雰囲気でした。ただ、私はなんとなく普通に就職することに疑問を持っていて、父親が大工で職人だったこともあり、組織に属さずに個人でもできる仕事がしたいと思っていました。とはいえ、田舎出の貧乏学生で何のコンネクションも無く、資格でも取っておけばなんとかなるか、という単純な発想で公認会計士の勉強を始めました。

公認会計士の試験は、経済学や経営学といった科目もあり、興味を持てる内容が多かったので、ハードでしたがなんとか続けることができました。最初の受験で全く自信が無かったのですが、運良く3年生の時に合格できました。ところが、バブル崩壊で急に景気が悪くなり、私と同じ年に合格した方は半分くらいしか会計事務所に入れてもらえない有様です。受験勉強が精一杯で、就職活動は一切していませんでした。途方に暮れてしまいました。仕方なく上智を一年留年して、会計事務所以外の就職先も探した結果、なんとかシステムコンサルの会社に入ることができました。

## 3. 独立開業とアートギャラリー

コンサル会社で働いている間によく少しか景気が良くなってきて、会計事務所が採用を増やし

てきたので私も転職しました。この頃から仕事が多忙で、しばらくキャンパスから遠ざかっていましたが、15年ほど前にOB会に参加したことをきっかけに、経鷲会のメンバーの方々にもお会いするようになり、少しずつソフィアンとの関わりが増えてきました。勤務していた会計事務所でも先輩方と一緒に社内ソフィア会を立ち上げて、幅広い年代のソフィアン会計士の皆さんと交流できたことは、いまも楽しい思い出です。

こうして会計事務所には20年間勤務していましたが、5年前に個人で独立開業することにしました。東京・馬喰町に事務所を借りたのですが、個人的に趣味で写真撮影やカメラ集めをしていたこともあり、個人事務所と同じスペースで、写真ギャラリーを開業することにしました。それまで写真は素人趣味で、プロの写真家とは全く接点がなかったのですが、ギャラリー運営をきっかけにソフィアンの写真家・アーティストに会う機会が増えてきました。日本の写真界では最も著名な賞である「木村伊兵衛賞」を受賞した都築響一さんには、定期的に写真展の企画をお願いしています。また、情報番組のコメンテーターとしても活躍しているフォトジャーナリストの安田菜津紀さん、法学部卒で音楽家でもある安達ロベルトさん、三大写真賞の一つ「林忠彦賞」を先日受賞された初沢亜利さん、経済学部で偶然同学年だったGoto Akiさんなど、写真の分野でも多くのソフィアンが活躍していて、とても心強く思います。

これからも本業だけでなく、ギャラリー運営を通じて、多くのお客様やソフィアンとの新たな出会いが生まれることを楽しみにしています。

(公認会計士・税理士・ギャラリー KKAG 代表)

ギャラリー KKAG HP <http://kkag.jp/>



2022年7月開催 なぎら健彦写真展  
「偶然に出遭えること！」でのライブ風景

## ゴルフと向き合った 12 年間

中村珠莉香 (経・営 4年)

経済学部経営学科 4 年の中村珠莉香と申します。この度は奨学金のご支援をいただき、誠にありがとうございます。頂いた奨学金はこれからの練習費用、大会費用に充てたいと思っております。

私は小学 5 年生から父の勧めでゴルフを始めました。最初はボールに当てるのが楽しく続けていましたが、次第に熱が入り、いつしか夢を聞かれた時には”プロゴルファーになりたい”と答えるようになっていました。小学校は私立に通っていたため、そのまま中学校に上がれましたが、練習に打ち込みたいと思い地元の中学に通うことになりました。その後もゴルフや勉強、受験などを経て高校に進学しましたが、高校 2 年生までは関東大会が最高成績で、全国大会には出場できませんでした。この結果を私なりに冷静に受け止めて、プロへの道を断念し、ゴルフは一つの熱がこもった趣味となりました。しかし親の支援もあり続けられており、また生涯スポーツとして楽しめるゴルフを始めたからには、学生でゴルフをする限りは悔いのない成績を残して引退したいと意気込み、試合に出場し続けました。高校 3 年生時には全国大会の一つである日本ジュニアゴルフ選手権に進む事ができました。

大学を決める際は、勉強が充実できる環境、留学の制度 (コロナウイルスで行くことはできませんでした。)、ゴルフの経験などから将来のスポーツの活性化につながる仕事に就くためのカリキュラムが揃っていることなどを踏まえ、上智大学経済学部を選択しました。

大学入学後はブランクもあり最初の 1 年間は思うような成績を残せませんでした。入学前の決意を叶えられず、非常に悔しく、残り 3 年間で実りあるものにするため、ゴルフだけでなく自分の内面から見つめ直しました。2 年生時はコロナウイルスの影響で全ての試合が中止でしたが、その時間を活かして毎日ゴルフと向き合いました。この結果、3~4 年生時には全国大会の一つの日本女子アマチュアゴルフ選手権や日本女子学生ゴルフ選手権に進みました。今年度は関東大会で優勝争いができ、ここがまだゴールではありませんが、少しずつ決意したことに基づいているのではないかと考えています。

上智大学の体育会ゴルフ部でも多くの部員と出会い、非常に良い経験を積み重ねています。他者と交流し、教えることで新たな発見を知り、また礼儀や作法を学ぶことで、人としても成長できたのではないかと考えております。ゴルフ部で 1 番印象に残っていることは、大学 4 年生の 5 月に行われた

団体戦の優勝です。団体戦は A~E の 5 つのブロックに分かれており、5 月の団体戦では C ブロックで試合を行いました。今まで準優勝で昇格することができず、何度も数打で涙を流していました。メンバー各自で各々の課題に取り組み、克服し、さらにチームとしての団結力を高め、優勝・B ブロック昇格を成し遂げました。個人では 4 期連続の最優秀選手賞に選出されました。入学して初めての団体戦が D ブロックから始まり、引退試合である 9 月の秋季団体戦では 2 つ上の B ブロックで戦えることは、想像しておらず、今から期待に胸を膨らませております。この経験は一つの成功体験であり、感じた嬉しさは一生の思い出になると思います。

コロナウイルスの影響で思い描いた大学生活を送ることは難しい状況が続いていますが、学科や部活動を通じて多くの仲間と出会うことができ、楽しい日々を過ごしています。私はゴルフを中心に日々の活動を送っていますが、勉学でも様々な知識を得て、新しい知見を習得しました。勉学・ゴルフにおいてここがゴールではなく、更なる高みを目指していくべきだと自負しています。卒業までの残り約 7 ヶ月でどこまで上のレベルに登り詰めることができるか未知の世界ではありますが、成長し続けていきたいです。

卒業後の進路はコンサルタント会社に就職予定です。経営学科で学んだことを活かし、またゴルフで培ってきた継続力や探究心、努力する大切さを忘れずに仕事に励みたいと思います。将来はゴルフなどスポーツ業界を支えられるような存在になり、スポーツの活性化に貢献したいと考えております。

最後になりますが、改めてこの度は奨学金のご支援のほど、ありがとうございました。これからも周りの方々の日頃のご支援への感謝の気持ちを忘れず、日々努力を重ねていきたいです。

(経済学部・経鷲会奨学金受賞者)



2022年8月 ラウンド中にて

## 不動産市場の現状と今後

大越 武 (1968年文・新)

小生が数名の仲間と「上智不動産ソフィア会」を結成して、早17年が経ちました。この間、経覧会の皆さんからはスタート時から大変なお世話をいただき、感謝いたしております。当会の中心メンバーとしても、藤井統司先輩（63年経・経）や不動産鑑定士の小國敏雄氏（78年経・営）が長年、リーダー格として若手を指導されており、そして今、3代目会長の上村茂徳氏（90年経・経）が当会組織を不動産ビジネスの商談の場として、飛躍的に拡大発展させたばかりか、上部団体の「大学不動産連盟」の中でも、枢要な地位を占める活躍をしております。前書きが長くなってしまいました、ご依頼のテーマ「不動産市場の現状と今後」について、拙文を述べさせていただきます。

ちょっと本題からそれますが、ある老舗の経済雑誌が、「この1年、どんな特集記事が売れたか」を調べたところ、一番よく売れた特集は「ウクライナ戦争」や「EV（電気自動車）」「半導体」でもなく、意外や地味な「相続」特集だったそうです。預貯金や株式・債券の金融資産、不動産などの相続に関する関心が高いのだという。なかでも税の優遇を受ける不動産には、投資の面からも興味が集まっているという。

そのような「不動産」と一口に言っても、不動産業は実に多岐多様にわたっております。最も身近な生活に直結している「住宅・マンション」をはじめ、「オフィスビル」「商業施設」「ホテル・リゾート」「物流・ロジスティクス」、「福祉・介護施設」、

さらには不動産を“動産”化した不動産投資・証券化事業などと広範囲です。また、大都市においては特定街区を指定した都市再開発の再生事業や、「国家戦略特区」による国際ビジネス拠点の整備事業、地方においては「街起こし」などの地域創生事業にも一役買っております。

「失われた30年」といわれたデフレ時代であっても、都会の住宅としてすっかり定着した最近のマンション動向をみますと、売れ行きが好調で、かなり元気なマーケットとなっています。今年上半期（1～6月）の首都圏マンションの1戸当たり平均価格は前年比1.5%増の6,511万円。東京23区内での平均価格は同0.6%増の8,090万円となり、1m<sup>2</sup>当たり単価ではなんと127万円。3LDK・70m<sup>2</sup>の標準的なマンションを都内で買うとなると8,890万円、これに関連経費を加えると1億円もの買い物になります。一般のサラリーマンでは、とても買えない時代となってしまいました。

それが売れているのだから、まさに大東京。一体、だれが買っているのだろうか。買っているのは大半が、富裕層とパワーカップル（夫婦の合計年収2,000万円以上の共働き世帯）。「アベノミクス」の超金融緩和策が今なお続く中、住宅ローンが歴史的な低金利であること、そのローンの所得控除も満期まで受けられる優遇策に加え、これからのさらなる物価高、エネルギー負担増、インフレ対策上からもマンションは買い時。特にインフレには不動産は強いのです。



7月の上智不動産ソフィア会の納涼会。前列右から3人目が筆者、その右後ろが上村会長。

今年2月の「ウクライナ侵攻」による急激な円安も手伝って、世界からの買い注文も殺到。東南アジアの富裕層はじめ、世界の投資ファンドが買い漁ってきています。もともと、日本の不動産は世界からみれば、まだまだ「割安」のところに、これまでの1ドル「105円」が「135円」(7月下旬)となり、2割も安く買えるのですから、たまらない魅力でしょう。

海外の投資ファンドにとっては、マンションばかりか、都内のオフィスビル市場も、「割安」「円安」で買い得とばかりに買いに出ています。東京の賃

貸オフィスビル市場はこの2年半、新型コロナの感染拡大により様変わりの低迷状況。都心5区の空室率は、この6月も6.39%となり、供給過剰の目安となる5%を17カ月連続上回っています。これにより賃料も下がり続け、6月も23カ月連続の下落。要因はコロナ禍で社会全体にDXが加速し、テレワークやリモートワークの普及が一気に進んだがためです。在宅勤務をはじめ、サテライトオフィス、フレキシブルオフィス、レンタルオフィスなど各種のシェアオフィスへの動きが高まっており、働き方改革がかなり進展してきているのです。

(上智不動産ソフィア会名誉会長(初代会長))

## 出会いに導かれて

山内彩子 (2000年文・社)

幼い頃から夢中だったのが、文学と美術の世界です。大学卒業後、出版社に就職、その後ギャラリーに転職して7年ほどスタッフとして勤めたのちに、自らギャラリーを開廊という来し方を振り返ると、「三つ子の魂百まで」という気もします。

けれども、自分でもまったく予想していなかったのは、個人事業主になるということでした。家族も親戚も、みな勤め人。私一人で“商売”ができるのか、しかもギャラリーという“不要不急”な仕事で……と、本人以上に周りが心配しながらのスタートでした。

ギャラリーのオープンは、2010年10月10日。覚えやすく、記念になる日を選びました。ギャラリー名の「SU(エス・ユウ)」は、「巣」からきています。作品が集い、育まれ、やがて巣立つ場所となるように、という願いをこめて名づけました。記念すべき第1回目の展覧会でご紹介し、以降も数年

ごとに個展を開催しているアーティストが、フランス人のロベール・クートラス(1930年パリ生まれ。85年同地で逝去)です。

ロベール・クートラスの作品との出会いは、スタッフとして勤めていた銀座のギャラリー無境でのことでした。彼と親しかった画家の橋場信夫さんが、ご自身が所蔵されている「carte」を見せて下さったのです。carteとは、クートラスが亡くなるまでの18年間厚紙に油彩で描き続けた手札大のカード画のことで、ひと目見たときから惹きつけられました。橋場さんのご紹介で、クートラスの晩年を支え、現在も遺作を管理されている岸真理子・モリアさんにご縁がつながり、ギャラリー無境でクートラスの個展を開催することとなりました。

打ち合わせのために岸さんがフランスから帰国



開廊記念のクートラス展会場



クートラスの「carte」

され、初めてお会いしたときのことは忘れられません。岸さんがクートラスと出会った1977年に私が生まれたことをお伝えすると、「じゃあ、私とクートラスの娘みたいね」と微笑んで下さり、「クートラスの作品を次の世代の方々に伝えていくという夢の手助けをしてほしい」とおっしゃいました。

その後、ギャラリー無境で数回クートラスの個展を開催し、ファンが増えつつあったところで、2009年に無境がクローズすることに。「あなたが独立するなら、クートラスのことはお任せしたい」という岸さんの言葉に背中を押され、翌年に一人でGallery SUを開いたのです。

ありがたいことに、オープニング記念のクートラス展は、懐かしい方々と初めましての方々に連日大盛況。緊張と安堵が入り交じり、この展覧会のことは今も夢の中の出来事のように。このとき出版された『僕の夜』（エクリ刊）という初作品集を皮切りに、岸さんが書かれた評伝『クートラスの思い出』（リトルモア刊）も含め、関連書籍が続々と刊行されました。そして、2012年にはフラ

ンスのシャルトル美術館、2015年には東京の渋谷区立松濤美術館、2016～17年には静岡のベルナル・ビュフェ美術館と京都のアサヒビール大山崎山荘美術館で回顧展が開催されました。現在は、東京・六本木の森美術館で11月6日まで開催中の「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」展に、reserve carte全点が展示されています（reserve carteとは、クートラスが岸さんに「これは散逸させずに保管してほしい」と託した469枚のcarteのことです）。岸さんの「クートラスの作品を次の世代の方々に伝えていく」という夢の実現のお手伝いをするのができたのは、個人的にも仕事上でも何よりの喜びでした。

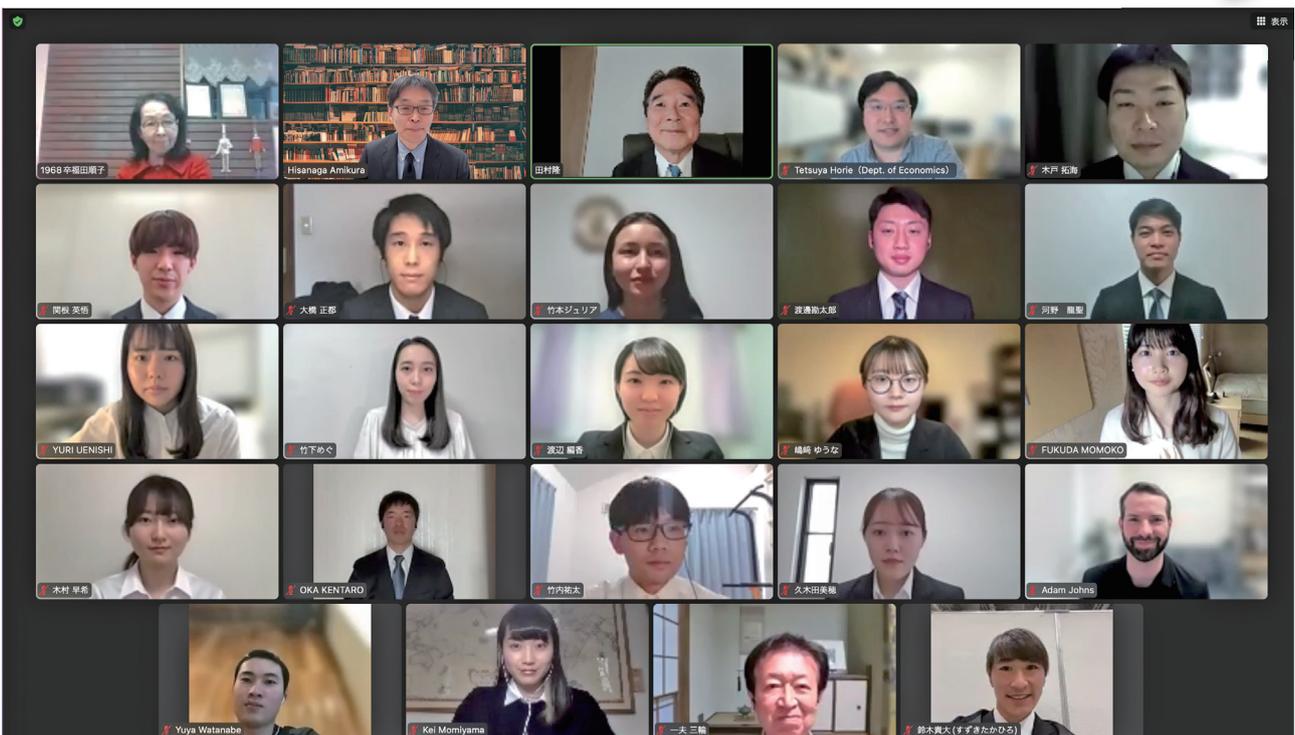
またたく間に時は過ぎ、この10月に開廊12周年を迎えます。まだまだ安泰とは程遠い零細ギャラリーですが、この業界の大先輩の「10年続ければ、もう大丈夫」という言葉を励みに、これからも人と作品との出会いを楽しみながら続けていきたいと思えます。

(Gallery SU代表)

Gallery SU HP <http://www.gallery-su.jp>



## 経済学部・経鷲会奨学金受賞者からの礼状



「経鷲会研究奨励金」・「経済学部・経鷲会奨励金」授与式（ZOOMにて）

## 体育会ゴルフ部での活躍

経営学科 中村珠莉香

経済学部経営学科の中村珠莉香です。

この度は、経鷲会研究奨励金を授与いただきまして、誠にありがとうございます。このような奨励金を頂いたことを非常に嬉しく思っております。頂きました奨励金はクラブ活動での活動費に充てる予定です。

3年間、上智大学生として勉学に励むと同時に、約11年行っているスポーツで競技に参加することや、同じ部活動の部員の育成に尽力して参りました。今年度は、日本女子アマチュアゴルフ選手権、朝日杯の出場、団体戦でのMVPを2度受賞、また国民体育大会（コロナウイルスにより中止）の神奈川県選手の内定をいただきました。思いが強いスポーツの活動で今回の奨励金を授与できたことを光栄に思います。来年度は全国大会に出場するだけではなく、一つでも上の順位にいられるよう、また団体戦で優勝を成し遂げたい目標はあ

ります。集大成となる1年に向けて、より一層活動に励んでいこうという決意が固まりました。また部活動だけではなく、勉強の面においても両立しながらも、学びの多い一年になるよう、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っております。

このような奨励金を頂いたことを忘れず、給付して下さった方々からの感謝の気持ちを胸に、生活していきたいと思っております。将来は、今行っているスポーツの繁栄などのための企業支援など、人々の生活がより豊かに暮らしやすいものになるよう、自分の知恵を絞って、社会に貢献していきたいと思っております。社会で多くの人の生活に貢献できるような人材になれるよう、この一年、濃密なものとするために努力を絶えず行っていきたい所存です。改めまして、この度、経鷲会研究奨励金を授与いただきまして、誠にありがとうございました。

## 【石井ゼミ】RIS 優秀論文賞受賞

経営学科 川合 岳、木戸拓海、久木田美穂

この度は、経鷲会奨学金に採用していただきまして、誠にありがとうございます。このような大変光栄な奨学金を授与いただけることを誇りに思います。同時に、残り少ない学生生活ではありますが、より一層身を引き締めて過ごしていきたいと思っております。そしてなによりも、日々ご指導くださった石井昌宏先生をはじめ、これまでに私達に関わってくださった方々に感謝申し上げます。

私達は経済学部経営学科開講のゼミナールに所属しており、三年次に「地震保険に対する需要の決定要因」をテーマとして研究を行いました。そして全国学生保険学ゼミナール(Risk and Insurance Seminar)に参加し、優秀論文に選出していただきました。また、その論文は学術誌『損害保険研究』に掲載されました。ゼミでは、コロナ禍ということもありオンライン上での活動が大半でした。そのため、思うように議論が進まない

など難しいことも多くありました。しかし、石井昌宏先生の手厚いサポートと、ゼミ生同士で役割分担を行い互いの足りない部分を補い合うことで、無事論文を完成させそして優秀論文に選んでいただけたと感じております。ゼミ生で協力しながら研究を進め、論文を完成させたときの達成感は、これまでの学生生活において体験することのできなかったものであり、貴重な経験となりました。またこの経験を通して、一から自分達の力で研究、論文に取り組むという研究活動の楽しさを実感することができました。

今後は、奨学金をいただいたことへの感謝の気持ちを忘れずに、ご期待に応えられるよう日々努力を続けていきたい所存です。この先社会人になり、大きな課題に直面した際にはこれまで上智大学で学んできた経験を役立てていきたいと思っております。最後になりますが、奨学金を授与いただきまして誠にありがとうございました。

## 研究助成論文採択

経営学科 杉本ゼミ1班

このたびは上智大学経済学部・経鷲会奨学基金奨学生に採用していただき、誠にありがとうございます。大変光栄であるとともに、身の引き締まる思いです。

わたしたち経済学部杉本ゼミ1班は、「シェアリング時代におけるマーケティング提案」というテ

マでグループ研究を行いました。研究計画は一般社団法人日本プロモーション・マーケティング学会の2021年度研究助成に採択され、論文を学会で発表する予定です。

本研究は、現代におけるモノを「所有」する欲求から「共有」する欲求への価値観の変化に注目し、

シェアリングサービスを広めるためにはどうしたらよいか、という疑問から出発しました。研究の結果、人々の持つシェアリングについての価値観とそれらに対する効果的なプロモーションを導き出すことができました。例えば、「他者に対する警戒が強い人」に対しては、「サービスの可視化と保証制度の充実による信頼の獲得」が有効であると提案しました。

一年間研究を行う中で困難なことが多くありました。テキスト分析、インタビュー、質問紙調査などの多面的な分析を行ったこと、7人でのグループ研究ということもありメンバー全員の意見を一つにまとめあげること非常に苦労しました。課題ができるたびに、解決に向けての方法や役割分担について

意見交換を徹底的に行い、やり遂げることができました。ご指導いただいた経済学部経営学科教授 杉本徹雄先生、研究にご協力いただきましたすべての方々へ、この場をお借りして感謝申し上げます。

班員の全員が2022年3月時点で4年生であり、グループでの研究の継続は難しくなりますが、この研究の過程で得られた考え方や経験を活かし、社会に貢献できるよう日々精進してまいります。

最後になりましたが、経済学部・経鸞会奨学金を授与していただき、重ねてお礼申し上げます。

(経営学科 大庭紗希子、佐藤里帆、嶋崎ゆうな、重永つかさ、園田里穂、栗山 京)

## 研究助成論文採択

## 経営学科 杉本ゼミ2班

この度は、経鸞会奨学金を授与いただきまして、誠にありがとうございます。

私たちは、日本プロモーション・マーケティング学会から研究助成を受けるグループとして採択され、無人店舗に関する研究を行ってまいりました。無人店舗は店員のいない店舗形態を意味します。事業者にとっては人件費の削減などの利点があり、日本の労働人口減少問題に有効な対策だと考えられる一方で、消費者にとっては接客を受けられないなどの不便さを伴います。顧客にとってのデメリットを払拭し、スムーズな買い物環境を提供するための店舗づくりを提案するという目的で研究を進めていきました。具体的には、約200名を対象にした質問紙調査や、企業を対象としたインタビュー調査などを実施し、より現実的な提案を導くために努力してきました。結果として店舗における温かみが重要であること、他者の視線を意識する消費者ほど無人店舗での購買に好意的であることがわかりました。店舗に温かみを持たせるためには出店場所や品揃えについて工夫が必

要であることも明らかになっています。また、買い物困難者と呼ばれる買い物へのアクセスが悪い人々のためにも無人店舗は有効と考えられているため、インタビュー調査を行い、操作補助の必要性が明らかになりました。研究過程においてはコロナ禍という状況により、オンラインでメンバー同士協力しないといけない場面も多く苦しんだ部分がありました。しかし今回奨学金を授与いただく形で成果を認めていただけたことを大変嬉しく思っております。

私たちはこの3月で大学を卒業します。今回の研究を通して、データを積み重ねる地道な努力の大切さやチームワークの大切さを学びました。これらを糧に、そして経鸞会の皆様から頂いたエールを力に「他者のために、他者ととともに」社会生活を営んでいきたいと考えています。

末筆ながら改めて、この度の研究奨励金を授与頂きまして、誠にありがとうございました。

(経営学科 竹内祐太、永野俊太郎、岡賢太郎、水島桃子、小須田早香、山口瑞葵)

## スペイン留学における異文化交流

## 経営学科 渡辺雄也

この度は、2021年度経鸞会奨学生として奨学金を授与できたこと大変光栄です。これを糧にこれからも上智大学での学びをより一層深められたらと思います。

2020年の春休み期間に行った短期スペイン留学における国際交流経験での奨学金授与となりました。その時期には、新型コロナウイルスがイタリアで深刻化したことで、1ヶ月半ほどの滞在になりましたが、幼少期からの一つの夢であったスペイン滞在の夢が叶いとても幸せでした。小学生時代にサッカーの大会で2週間ほど、スベ

インのバルセロナとマドリードに訪れたことがきっかけで、スペイン文化に興味を持ち、大学ではもっと長くスペインに滞在しようとして小学生の時から考えておりました。そのため、上智大学の第二言語ではスペイン語を履修したり、オンラインでスペイン語を学んだりなど、日本にいてもスペインについて事前に勉強していました。そして、スペイン第三の都市と呼ばれる「バレンシア」にて、今回の留学を行いました。バレンシア現地では、多くの人々の協力で特別にバレンシアのサッカーチームに所属することもでき、旅行で

は経験できないような多くの素晴らしい経験を積むことができました。そして、スペインでの経験を評価して頂き、今回の奨学金を授与できたことはとても嬉しく、誇りに思います。奨学金授与式では他の学生たちのスピーチも聞くことができ、とても刺激になりました。

今回の経鸞会奨学生として選ばれたことを誇りに、これからも様々な挑戦をしていきたいです。改めて、2021年度経鸞会奨学生に採用されたこと深く感謝いたします。上智大学を卒業しても、上智大学の看板に恥じぬ行いをできるよう真摯に残りの人生を全うしていきたいと思いますので、今後とも、よろしく願い申し上げます。

## SOPHIA × CUHK

## 経済学科 竹本ジュリア、木暮信太郎、経営学科 吉村太一

私達は、2021年の夏、香港中文大学と経済学部、総合グローバル学部連携のプログラムに参加し、二週間に渡って香港の学生とコミュニケーションを取りながら、バーチャルツーリズムという、オンライン上での旅行について講義を受けたり、その講義を基に、香港の学生と協力してバーチャルの旅行の企画を作り上げる活動を行いました。そしてその旅行の企画を JUNTO の方に聞いていただく機会もありました。私達が香港中文大学の学生と本プログラムで関わっていく中で得た三つの知見、経験を簡素にお伝えさせていただきます。

1つ目に文化、所属大学、専攻、がそれぞれ異なる学生同士がグループでひとつのものごとに取り組めたことです。講義や議論はすべて英語で行われることから、自分の伝えたいことがうまく相手に伝えられなかったり、相手の伝えたいことが十分に理解できなかったり、様々な困難はありましたが、熱意を持ってコミュニケーションを取り続けることで旅行の企画を作り上げることができました。

2つ目に両国の文化に理解を深められた事です。このプログラムを通して、高校までの受験のため

の英語学習とは違い、実用的な英語に触れることができ、言語の学習に非常に役立てることができました。また、香港の学生と議論を交わす中で、海外の学生の考え方や、海外の文化、海外から見た日本のイメージについて理解を深めることができました。

最後に英語力の向上をグループに所属する三人全員が図りたいと思えた事です。本プログラムでは、外部から学びを得るだけではなく、現在の自身の問題点について認識し、改善する機会を得ることができました。英語の能力の未熟さや、自国や他国についての理解の甘さが、海外の学生とコミュニケーションを取る中で浮き彫りとなり、改善しなければならぬと気づくことができました。

これらの私達の活動について評価していただき、深く感謝しております。今回受け取った奨学金は、私達のこれからの成長、また、その成長を社会に役立てるための学習に活用させていただきます。

私達はこれから一層学業に励み、真摯な学生生活を送ることを誓い、有意義な学生生活を送る所存でございます。

## 経済学科ヘルパー

## 経済学科 2021年度ヘルパー長 窪田美玲

この度、経鸞会奨学金を頂戴いたしましたこと、大変光栄に思っております。経済学科ヘルパー24名を代表し、心より御礼申し上げます。

ヘルパーとは、新入生が気持ちよく大学生活を始められるようサポートを行う団体です。新入生の履修登録や部活動・サークル選びなど大学生活に関わる様々な不安・疑問を解消するために活動してまいりました。昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、オンラインにて学生生活ガイダンス会を実施いたしました。しかし今年度は感染状況が比較的落ち着いていたタイミングでしたので、感染対策に配慮しつつ対面での Sophia Orientation Day を実施することができました。新入生は大学生活を前に、初めてクラスの人と顔を合わせ、最初はかなり緊張した面持ちでしたが、

段々と打ち解けていく姿が印象的でした。一人ずつ自己紹介をした後には、共通点のある新入生同士で談笑する姿が見受けられました。新入生同士が交流する場の提供に尽力でき、ヘルパーとして非常に嬉しく感じます。

また、年度初めのガイダンス会以後にも、新入生から授業の受け方や定期テストについての質問などを受ける機会がありました。新入生の学業に対する意欲の高さに私自身刺激を感じ、身の引き締まる思いでした。

今後は私たち自身が学業に対して真剣に取り組む姿勢を示すことで、新入生の模範となる学生になりたいと考えております。今回頂いた奨学金はそのような取り組みを続けていくための資金に充てさせていただきます。

## 経営学科ヘルパー

## 経営学科 2021年度ヘルパー長 竹下めぐ

この度は経鶯会奨学金に経営学科ヘルパーを推薦いただきありがとうございます。21名の経営学科ヘルパーを代表してお礼申し上げます。

ご存じの通り、ヘルパーは新入生の新生活をサポートする学部公認の団体です。今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、4月に学内でオリエンテーションを行いました。この形式での実施は前例がなく、試行錯誤しながらも無事、履修登録や新入生同士の仲を深めることに貢献できました。ヘルパーはこのオリエンテーションの企画・運営や、日々のSNSでの発信・相談に乗るなど、様々な活動を行いました。

話が変わるのですが、“ヘルパー”は上智大学ならではの文化だと思います。新入生を上級生が密にサポートするという体制が整っており、私自身、新入生の時にヘルパーの先輩方大変お世話になり、私も新入生のために何かがしたいという思いでヘルパーになりました。このように先輩方から受け

継いだヘルパーという文化が、後輩たちに引き継がれていくという、学年を越えた繋がりがあることはとても素敵な文化に違いありません。このような上智大学の“for Others, with Others”を体現した文化に私たちも携われたことをとても光栄に思います。

こうしてヘルパーの活動を全うすることができたのは、学科長のジョーンズ先生、オリエンテーションの担当をしてくださった細萱先生、杉谷先生、経済学部事務室の一杉さんのサポートがあったからこそです。この場を借りてお礼申し上げます。

私個人の話になりますが、このヘルパーの活動を通して得た、引率力や企画力を所属する杉谷陽子先生のゼミでの研究活動において生かし、経鶯会奨学金を頂いた身として恥じないよう、努力と精進を続けてまいります。

最後になりますが、経鶯会の皆様心よりお礼申し上げます。

## 訃報



経鶯会会員として長きに渡り、ASF 経鶯会主催行事「ワインと料理のマリアージュ」の講師及び料理の調理提供にご協力いただいた上原恭子さん（76経営）が、令和4年7月22日にご逝去されました。

上原恭子さんは野菜ソムリエとして全国各地の野菜や果物にスポットを当て、そのPRにご尽力されていました。また、ソムリエの上原隆一さん（経鶯会第7代会長）とは同じ佐藤ゼミ出身でご結婚され、ご夫婦で仲むつまじくエネルギッシュに活動されていたのがとても印象的でした。そして、在りし日のSJ ガーデンでのお姿が目に残ります。

経鶯会に対する生前のご厚情に深く感謝すると共に、心からお悔やみを申し上げます。

役員一同

## エコノミアン編集雑記 『ソフィアの鶯 その⑨』

コロナ禍が発生してから既に3年半が経過している。いつになったらコロナ禍以前の生活や経済活動ができるのだろうと誰もが想っていることだろう。コロナ禍制圧のための決定打がまだに具現化していない。ワクチンも続発するウイルス変異株への感染予防効果が高いわけではなく不安である。海外では、集団免疫政策が失敗し、感染拡散を封じ込める切り札と思われたロックダウンも有効ではなかった。

しかしながら、国内では、人の集まるプロスポーツ、コンサート、演劇、娯楽施設等々も座席数の制限なく入場が可能となってきている。通勤時間は交通機関の混雑が復活している。

母校では全面的に対面授業が行われるようになったようである。これは非常に喜ばしいことである。

結局、感染症対策は、個人の自由意思に委ねるような方向となりつつある。多分この方向性は正しいのであろう。私たちはこの3年間で図らずも感染症や免疫の知識が増えた。勿論専門家には到底及ばないが、多くのメディアや書籍等の情報を素人なりに整理すると、コロナ禍の今後についての推定は単純な帰結となると思われる。すなわち、①ゼロコロナは非常にハードルが高い。無理かもしれない。②ワクチンは一時的に有効ではあるが、社会的、個人的な感染防止対策が十分になされないと収束傾向にはならない。

私は、この不幸なコロナ禍と運命を共にして閉じこもっているのではなく、感染予防対策を十分に実践して、従前に近い個人活動を積極的に行うことにします。

（編集担当 大武宏至（1978年経・営））



### －年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。